BCJA Newsletter, issued biannually, published by the British Council Japan Association
2, Kagurazaka 1-chome, Shinjuku-ku, Tokyo 162-0825

Newsletter of the British Council Japan Association

BCJA Newsletter

No.28 April 2, 2012

会長就任のご挨拶

BCJA 会長　青柳昌宏

前会長の横川信治氏より引き継ぎまして、2011 年 3 月に会長に就任いたしました青柳昌宏と申します。本来であれば、前回のニューズレターでご挨拶すべきところを、就任直後に発生しました東日本大震災で、勤務している研究所が被災したため、様々な対応に追われて、ご挨拶が遅くなり、大変失礼いたしました。未曾有の大地震のため、福島県、宮城県の太平洋岸沿いの地域では、大津波による被害を受け、たくさんの尊い命が失われました。皆さまと一緒にご冥福をお祈りしたいと思います。

さて、BCJA の活動については、本来の BC 奨学金 OB 組織としての活動に加えて、引き続き BCJA 奨学金制度の運用により、英国留学のサポートを進めてまいります。また、前会長の改革により、BCJA 奨学生 OB の会員化に向けた会員資格の見直し、BCJA 会員数の増強、年会費の導入よる BCJA 財政基盤の安定化などが実施されました。その路線を継承してまいります。

奨学金制度の運営安定化に向けて NPO 法人化の準備を開始したいと考えております。タスクチームを編成して、法人化プログラムの策定を進めてまいります。ご賛同いただける方々のご参画を期待いたします。

ところで当方の専門分野は、半導体電子機器を中心とする電子工学でありまして、最近の産業技術分野での日英研究協力活動の一端をご紹介したいと思います。現在取り組んでいる研究開発テーマは、3 次元高密度実装技術であり、従来の半導体デバイスの微細化による平面的な集積技術に対して、半導体 LSI デバイスを積層して、3 次元的に集積する技術になります。デバイスを積層するために微細なバンプと呼ばれる突起状金属を形成しますが、このバンプ形成技術について、国際会議 ECTC (Electronic Components and Technology Conference) で知り合いとなった、英国 Loughborough 大学の Changqing Liu 教授と EU 第 7 次研究開発計画 FP7 の人材交流マリーキュリープログラムに共同提案して、昨年 7 月より共同研究を開始しております。このプログラムでは、日本の参加メンバーに直接資金を配分することはなく、今回の共同研究では、日本からの渡航費用は、自前負担となっております。それでも、英国から優秀な博士課程の学生を EU の費用で受け入れて、共同研究を実施できますので、メリットが大きいと思っております。世界中から優秀な学生、研究者を受け入れて、国際的な研究開発環境作りが重要であるとあらためて感じているところです。

（Masahiro Aoyagi, 独立行政法人 産業技術総合研究所、National Physical Laboratory 1994-95）

****

2011 年度英国留学奨学金審査委員会ご報告

BCJA 英国留学奨学金審査委員会　委員長　白鳥　令

2001 年から始まりました BCJA 英国留学奨学金は、今年で 11 年目、新しい歴史をつくる年度となりました。本年も、昨年に引き続き 8 名の方々に奨学金を差し上げることができました（当初、8 名を選考としましたが、2 名の辞退者がありました）。授与者として選出されました方々は、いずれも、業績・能力の点でも英国留学の動機の明確さの点でも非の打ち所のない優秀な、英国の大学院レベルの学術研究機関から既に受入の決まっている方々で、今後の活躍が期待されます。奨学金のためにご寄付いただきました BCJA 会員の皆さま方、審査を担当されました委員の先生方に、心からお礼を申し上げます。

本年度の応募者総数は 80 名で、昨年度の 54 名を大きく上回りました。この 3 年間を見ても、2009 年の 41 名、2010 年の 54 名、2011 年の 80 名と、年を追うごとに応募者が増えています。奨学金の額がわずか 15 万円という少額の BCJA 奨学金にこれだけの応募があるのは、現在の経済状況を反映していますが、同時にもっと他の理由もあると思われます。

われわれ BCJA 会員の多くは、かつて英国政府（British Council）奨学金で英国に留学しました。私自身も、1963 年

からBritish Councilの奨学生としてOxford大学のPembroke Collegeに留学し、貴重な経験を得ることができました。ところが、現在、国家公務員等フルタイムの職務経験を有する限定的な人々を対象としたチーブニング（Chevening）奨学金のような奨学金はありますが、かつてのBritish Council奨学金のような、誰でもどの分野の専攻でも応募できるオープンな英国留学の奨学金が存在しません。British Council 奨学金は、日本が先進国となった現在、日本からの留学生には適用されていません。昔British Council奨学生で英国に留学された多くの方々が、現在日本の学界や実業界で指導的な立場に立って居られることを考えると、かつての British Council 奨学金のようなオープンな英国留学奨学金が存在しないことは、日英関係の広範な支持基盤の将来を考えると、決してよいことではありません。BCJA 奨学金は、額は少額でも、この隙間を埋めているのだと思います。

BCJA奨学金への応募が増えているもうひとつの理由は、この奨学金の授与者の質の高さが評判となっているためだと思います。現在、英国のいくつかの大学や研究機関が、この奨学金の授与者に追加的な奨学金授与を検討しています。BCJA奨学金の授与者には、British Councilの代表から推薦状が発行されますが、これによって例えば医学の分野では、診療に際してより広範な研修への参加が可能となっています。私共は、BCJA 奨学金授与者の質の高さを今後も維持し、額としては少額でも、名誉ある奨学金としての評価を高めたいと考えています。

2011年度奨学金授与者リスト

姓	名	留学先研究機関	研究分野	所属／出身校
斉藤	雪絵	University of Oxford	経済地理学	慶應義塾大学
河野	雄太	University of Bradford	紛争解決学	東京国際大学
緒方	健	University of Cambridge	材料科学（電子工学、プラズマ科学）	東京大学
高野	友香	School of Oriental and African Studies(SOAS), London	翻訳理論（日本語、英語、アラビア語）	中央大学
坂井	健二	University of Southampton	医学（神経内科、神経病理学）	金沢大学
椎名	由美	Imperial College, London	医学（心臓病学）	千葉大学

現在、BCJA奨学金は、BCJA会員の募金によって維持されていますが、先月、ある地方在住の BCJA 会員から、「英国留学で貴重な体験を若い頃に得たので、遺言の中で、遺産の一部を BCJA 奨学金に寄付したい」との申し出がありました。奨学金委員会は、感謝の気持ちで、この申し入れをお受けしました。私も、若い頃の英国留学の経験に報いたいと、英国エセックス大学の比較政治学の教授職を 1983 年から1990 年迄つとめましたし、エセックス大学在職中に、三和銀行のご厚意で約 4 億円の寄付を同行からエセックス大学に行うことができました。多くのBCJA会員の皆さまの善意の行為が、日英の学術文化関係を草の根で支えているのだと考えています。どうぞ、この BCJA 奨学金を維持し育てるために、今年度も、BCJA会員の皆さまからBCJA英国留学奨学金口座へのご寄付を心からお願い申し上げます。

来年度の BCJA 英国留学奨学金応募要領等の詳細は、来年 4 月初旬に BCJA のホームページに発表する予定です。

****

2010年度BCJA 英国留学奨学金授与者からの近況報告

英国留学記／KCLでの研究生活

谷口翔平

私は2009年8月から英国King's College London (KCL)の博士課程において、ナノサイエンスに関する研究に携わり、現在に至ります。何もかもが初めての留学生活において、BCJA 奨学生として私を支援して下さった事に心から感謝いたします。

1. 研究／大学生活

私の博士課程での研究は半導体ナノ物質の合成・応用に関する研究で、特に半導体物質の一種である、CdTe（テルル化カドミウム）の合成に携わってきました。この半導体は現在主に太陽電池の材料として用いられていますが、CdTe を極めて小さなサイズ（ナノサイズ）まで小さく加工することで、通常のバルク上の CdTe とは異なる特性を持つことが知られています。私はこのナノサイズの CdTe を合成し、さらにその光学特性・構造を制御する方法を開発しております。この研究の目的として、将来の安価・高性能な太陽電池材料に加えて、発光素子・電子工学における新規材料の創生に貢献することが挙げられます。

テルル化カドミウムナノ粒子。溶液中に分散しています。

ナノテクノロジーは次世代の技術として科学技術・産業界から大きな期待が寄せられています。しかしその一方で、過去の公害や、昨今の原子力発電に関する問題に見られるよ

うに、ナノテクノロジーもまた私たちの知り得ないようなリスクを抱えていると懸念されます。私たちの研究グループでは単にナノ物質を合成するだけでなく、このナノ物質の生体に与える影響を他大学の研究グループと共同で研究し、より環境に配慮したナノ物質の創生を目指しています。

大学での活動に関して、私は研究系の博士課程学生という事もあり、研究活動（担当教官とのディスカッション、実験、分析、研究結果の報告）をメインに大学生活を送っています。研究活動自体は日本の大学院と同様のスタイルであると言えますが、私が英国に留学して感心したことは、大学が研究とは別に、より一般的なスキルの習得にも力を注いでいる所です。例えば、言語習得、プレゼン能力、コンピュータスキル、中には上司と上手く付き合う能力といった講座も存在します。講義は単にノートを取るだけではなく、講師と学生、または学生同士で議論を重ねていって授業を進めていくスタイルです。始めは不慣れな環境に私の拙い英語も重なってなかなか自分の考えを主張できずにいましたが、周りの方のフォローもあり、徐々に授業にも馴染むことが出来ました。学生は卒業の必須要件として、このような講義や学会、勉強会等の活動に参加し、自分に必要なスキルを磨く事を要求されます。特に決まったカリキュラムは存在せず、自分のキャリアに見合った能力を伸ばしていく、というスタイルは、学生自身の主体性を高める上で非常に有益であると感じました。

2. KCL

私はロンドン大学のカレッジの一つである KCL の物理学科に所属しています。KCL は総合大学であり、物理学科の他にも工学、医学、精神学や、法学、言語学、芸術と様々な分野の学生がロンドン市街を中心とした複数のキャンパスに在籍しています。KCL の強みは様々な分野の学生が交流できる環境に加え、ユニーバーシティカレッジ、インペリアルカレッジといったロンドンに存在する大学との連携にあると考えます。実際、興味のある教授の講義があれば気軽にこれらの大学に訪れることが出来るし、これらの大学間での共同研究も盛んに行われています。

私の在籍する物理学科は電磁気学におけるマクスウェル方程式で有名な James Clerk Maxwell の在籍した学科として有名で、過去に4名のノーベル賞受賞者を輩出しています。現在は素粒子物理学、コンピュータモデリング、実験物理学の三分野を中心として研究を行っております。在籍する学生、スタッフはヨーロッパを中心に様々な国から構成されており、日常会話一つにおいても興味深く感じることがしばしばあります。特に日本の文化や社会制度等に興味を持っている方が多く、彼らとの会話を通じて貴重な経験を積むことが出来たと感じています。

3. 留学生活

現在は博士課程の終盤という事もあり、忙しい日々が続いていますが、1・2年生の頃は週末はよくロンドンを散策したりケンブリッジにいる知人を訪ねたりしていました。ロンドンには世界的に有名な博物館、美術館が数多く存在します。そういった所で時間を気にせずに展示物を見て回れる、というのはロンドンに留学する者の特権だと言えるでしょう。また、長期休暇を利用してヨーロッパの他の国々にも出掛けました。留学の目的は人それぞれだと思いますが、これから英国留学を予定されている方がいらっしゃいましたら、何とか時間を工面して「遊ぶ」事をお勧めいたします。

また、英国に留学すると言うと、食の話題がよく出てきます。実際英国の食に関してネガティブなイメージを持つ日本人の方々と話をする機会が何度か御座いましたが、私自身は特に不便を感じることはありませんでした。ロンドンは多文化都市である為、様々な国のレストランが存在し、美味しい料理を提供してくれます。（英国人によると、ここ 10－15 年で料理の味が劇的に改善されたようです）ただ、価格に関しては現在の為替を考慮しても、ロンドンの外食は決して安いとは言えません。しかし自炊となると話は別で、野菜や果物等の食材は基本的に非常に安く購入でき、また日本食材も簡単に手に入れることが出来ます。

個人的に英国に留学して最も気に入ったのは、イギリスのビールです。英国では Ale と呼ばれる、苦めで炭酸が少なめのビールが一般的で、パブに行くと様々な Ale を楽しむことが出来ます。Ale を片手に同僚と会話を楽しむ。これが私にとって最も効率的な英会話の勉強だったように感じます。

4. 今後について

2009 年からの研究活動も終盤となり、現在は博士論文の執筆に励んでおります。また、今までの研究結果も化学系国際学術誌に三報掲載され、個人的には充実した研究生活を送れたと感じております。本博士課程は今年の3月を目途に修了する予定で、4 月からは日本に戻って化学メーカーに就職する予定です。新たな職場では自分の今まで培ってきた経験を活かして、研究者・技術者として自分の知見を広げていきたいと考えています。

最後になりますが、BCJA の皆様に私の留学目的、研究を理解して頂き、奨学生として採用して頂いたことは、今回の留学のうえで大きな励みとなりました。今回の英国留学を通じて、単に最先端の研究に携われただけでなく、自分の人生にとっても大きな転換点となったと確信しています。今後も現地で築いた人脈を通じて英国と何らかの形で関わっていければと思います。BCJA の皆様のご支援、誠にありがとうございました。

（2010 年度 BCJA 奨学生, King’s College London, ナノサイエンス（無機化学・生化学））

****

2010 年度 BCJA 英国留学奨学金授与者からの近況報告

ロンドン大学 King’s College 英文学科留学体験記

庄子ひとみ

私は King’s College London の英文学科で MA を取得後、同校の Ph.D. Programme に進学し、現在博士論文を執筆中

です。ヴィクトリア朝世紀末の文芸サークルで当時の雰囲気を伝える詩人・文芸批評家として活躍しながら、1908 年に精神疾患と診断された後は第一線から退いてしまったアーサー・シモンズ(Arthur Symons: 1865-1945)について、これまで比較的軽視されてきた旅行記等も含めた包括的な作品研究を通し、シモンズが果たした国際的な文学的貢献の再評価を目指しています。

詩、文芸批評、雑誌編集と多岐にわたって活躍した彼の作品は日本国内に於いても、特に大正期の象徴派詩人たちに多大な影響を与えました。複数の外国語に通じた英国人シモンズが、フランスやベルギーの作家達の作品を批評及び翻訳によって英語圏に紹介し、アメリカのモダニスト達に新しい文学の可能性を示唆しインスピレーションを与えた功績は近年の英文学研究において広く知られています。しかし一方で、シモンズの文章がさらに遠い地、日本の文学の変化にも貢献していたことについては英国内において殆ど知られていません。日本の文筆家達が欧米とは異なった価値観でシモンズの文章を評価し、共感と憧れの眼差しを隠さなかった事実について、日本人学生として英語で博士論文を執筆する機会にめぐまれたのですから、積極的に紹介していく予定です。

政治的な立場から果たされる、具体的な目的に根ざした外交が重視される一方で、個人レベルでゆっくりと育てられ浸透していく種類の国際交流、相互理解があるのだとしたら、文学は確実にその役割を果たしてきたと思います。文学的想像力によって遠い異邦の人々の人生の一瞬に興味深く接し、思いを馳せ、共感すること。知らない他者への関心と共感をもとめる欲求と交流の構図は、現代では印刷物から映画や音楽、インターネットと多様に形を変え、スピードとボリュームを増しながら世界中で展開されていますが、この原点はそもそも書かれたものを読み、自分なりに解釈することからはじまっている。過去や現代において書かれた国内外の様々な文学を比較しながら読み解く文学研究は、作者／読者の生きた時代と人間を相互に映し出すという点で興味深い分野であり、常に現在進行形で変容し「終わり」のない作業でもあるとおもいます。そしてこの作業を継続する上で、日本にいた頃から憧れていた研究者に指導を受け、文献調査をする上でも最高の環境を与えられている現状は、渡英して三年が経過する今でも時折夢のような心持ちがします。

King's College 英文学科は、大学の英文学科としては世界最古の歴史があり、私が通っているキャンパスはロンドンの中心部、Strand にあります。ナショナル・ギャラリーのあるトラファルガー広場やコヴェント・ガーデン、あるいはセント・ポール寺院からも徒歩圏内で、観光にもとても便利な場所です。MA 時代は授業が午前～夕方に終了することが多かったのですが、Ph.D.に移行しますと読書会やセミナーの殆どが夕方以降に始まり夜の九時頃終了ということが殆どです。ほぼ毎回ワインや軽食が振る舞われ、MA 時代は近寄りがたい印象象を感じていた教授や学生が同席し、リラックスした雰囲気のなか議論することに当初は驚きました。もちろん、泥酔して著しく羽目を外すような人はいませんが、時々、面白い光景はみられます。学生同士の気軽な読書会のおわりには、近所のパブによることもあります。大学の側には歴史あるパブも複数あり、私のお気に入りは大学図書館から徒歩数分でいる Ye Olde Cheshire Cheese です。ここは英文学科の先生もよく使うパブのひとつで、17 世紀からつづく歴史を物語るかのように、年季の入った内装、暖炉の火や床にまかれたおがくずも、独特の雰囲気を演出してくれます。私が研究しているシモンズや友人の W.B.イエーツが 1890 年代に頻繁に訪れたという記録もあり、 ここにくると、時代を超えて同じ場所にいることが嬉しくて、つい飲み過ぎてしまいそうになります。（飲めない人にはレモネードやジンジャーエールもあります。）

現在は生活を楽しむ余裕もでてきましたが、ロンドンに来た当初は慣れない環境に加え、King's は一年で退寮が原則なのでその後の住居の問題等、部屋や図書館にこもって研究していればよいというわけにもいきませんでした。課題に追われながら生活環境を整える為の猥雑な手続きをこなし、時に不測の事態や問題を解決しなければならず、体調を崩したこともあります。しかし今となっては、半ば自己満足的な武勇伝として振り返っています。今後留学を予定されている皆様には、予想外の状況を時に楽しみ、必要な場合は強気に交渉する態度も身につける気概で頑張ってほしいと思います。口頭で自分を防御する機会は、論文の公開審査だけではなく、ロンドンでは日常にあふれています。

最後になりましたが、留学を継続する上で精神的にも金銭的にも大きな支えとなった、奨学金の給付を決定してくださった BCJA の皆様に改めて感謝の気持ちを伝えたいとおもいます。今後も奨学金制度が継続され、夢の実現に向かって前進する学生の支えとなってくれることを祈念いたします。

（2010 年度 BCJA 奨学生, King's College London, 英文学）

****

2010 年度 BCJA 英国留学奨学金授与者からの近況報告

作曲留学

森本 洋太

2010 年度 BCJA 奨学生として英国留学をご支援頂きありがとうございます。皆様への感謝の意を込め、研修のご報告を致します。

留学の経緯

私は 2006 年に国立音楽大学で修士課程を修了し、ヨーロッパで研鑽を積むべく渡蘭しました。ハーグ王立音楽院で作曲・電子音楽を学び、2010 年から英国バーミンガム大学で博士課程研究を開始しました。同大学の電子音楽設備が充実していること、指導教授の Scott Wilson 氏が器楽、電子音楽の双方に精通していることなどから進学を決めました。作曲の博士課程の取得条件は、作品群を納めたポートフォリオ提出と、制作に関わる技術的研究です。作品の質は元

より、相当量の作品を作ること、国際的な場での発表・評価が課程の主要な実績となります。

活動報告

私の制作上の関心は、器楽や電子音楽の他、ダンスや映像といった他分野との連携にもあり、これまで各地の音楽祭や芸術祭、学会で発表をしてきました。

研修開始の翌月にはフランスのポワチエで開かれた芸術祭で音楽と映像のための作品を演奏しました。複雑系の科学を援用した音響生成とその音信号パターンの映像化による、音響と映像の相互作用を探求した作品です（写真 1）。同月、台湾の電子音楽学会でこの作品に関する論文も発表しました。

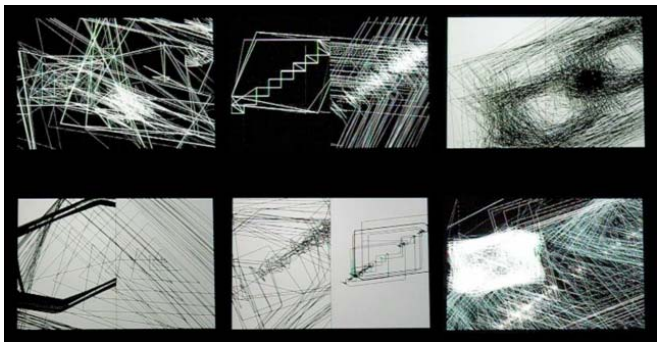

写真 1

12 月にはイタリアのローマでギターと電子音響のための曲が演奏され、スロベニアでは鑑賞者の介入によって作品の音響・映像が変化する展示型の作品を発表しました（写真 2）。

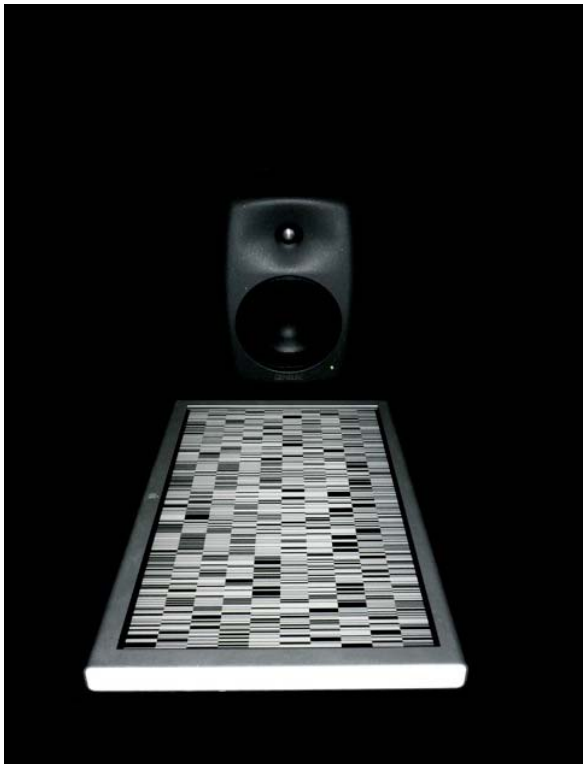

写真 2

翌年、2 月にはオランダで他の二人のメンバーと結成した、ダンス、音楽、美術、香などを含む在蘭邦人による学際的プロジェクト sukebeningen のコンサートがライデン市であり、3 月末から 4 月にかけて帰国、東京、札幌で口頭発表とワークショップを行いました。震災後間もなく、歌舞音曲自粛の雰囲気の中でも、関係者の協力を得て実りのある発表ができました。

その後も米国、欧州各地で作品発表の機会があり、6 月には北海道大学情報メディア環境学研究室の青木直史氏と共著論文を日本音響学学会で発表。8 月には大友良英氏らが発起人の世界同時多発イベント FUKUSHIMA! のアムステルダムコンサートに出演しました。「音楽や芸術を通して未来の福島の姿と持続可能な社会を考える」というイベントの趣旨を念頭に新作を発表しました。

写真 3

9 月にはトルコ、イスタンブールで音楽・映像作品を発表し、10 月はスイス、ジュネーブにてアンサンブル vortex 委嘱の新作を発表しました。11 月にはバーミンガムの CBSO センターで大学が所有する BEAST (Birmingham ElectroAcoustic Sound Theatre) システムによるコンサートに出品しました。100 台近くのスピーカが聴衆を取囲み、縦横無尽に音が移動する三次元音響作品を発表（写真 3）。この様な活動が評価され、大学の博士課程エリート研究奨学生に選ばれました。

今後の活動

4 月にはロンドンで開催される電子音楽シンポジウムで、開発中の音響生成ライブラリについての口頭発表とデモ、plus-minus アンサンブルのための作品の初演に加え、音楽と映像のための新作を予定しています。皆様のご支援にお応えできるよう、残り二年の研究生活を有意義なものとしたいです。

ホームページ：http://yota.tehis.net/

（2010 年度 BCJA 奨学生, University of Birmingham, 作曲）

****

2010 年度 BCJA 英国留学奨学金授与者からの近況報告

鈴木　悠

私は 2010 年 10 月から 2011 年 9 月まで、Colchester にある Essex 大学の修士課程で国際人権法について学んできました。この場をお借りしまして、この留学を支援してくださった BCJA のみなさまに心よりお礼を申し上げます。本当にありがとうございました。

Essex 大学の国際人権法コースは世界で最も歴史が古く、先生方の中には、現役のバリスタや国連特別報告者や国連自由権規約委員を務められた方、欧州人権裁判所のケースに関わった方、国際 NGO の法律顧問などがいらっしゃり、最新かつ最前線の経験や情報をもとに、学問的な観点だけではなく実務的な観点からも人権保障について学ぶことができます。卒業生の中には、国連や NGO などの人権分野で活躍されている方も多く、学生の中にもすでに人権分野でのキャリアを経てきた経験豊かな方もいました。このような環境は日本では得難いものであり、その中で多種多様な価値観を反映する人権について見聞を広め、考える機会が持てたことは非常に有意義なものでした。

私の主な研究対象である欧州の人権保障制度、特に、欧州統合が進む中で欧州人権条約制度の担う役割及び機能については、欧州連合の欧州人権条約加盟が現在進行形で進められていることもあって、先生から毎日のようにレポートや判例が送られてきました。読み込むのが大変なときもありましたが、それが新しい法構造の胎動であると思うと、今後も研究を進めていく上での可能性を感じました。

隔週で行われていたディスカッションの授業では、国連理事会の特別会合や各種人権条約の申立手続きを利用しようとする NGO のブリーフィングにおける競合プレゼン、欧州人権裁判所などの場面を設定してロールプレイングを行いました。現在の国際人権法をどのように利用するか、一方で現在の人権法だけではカバーしきれない問題についてはどのように対応するか、その限界を克服する術はないか、法はどこまでカバーするべきなのか、先生方も交えて熱心に議論する、その姿勢に刺激を受けました。

また、Essex 大学には人権センターというものが設立されており、そこでは人権問題に関心を持つ学生たちが、アムネスティなどの NGO と協働してアドボカシーや勉強会、レポート作成などの活動を行っています。私はビジネスと人権のプロジェクトに参加し、研究と実務の架け橋になるということがどういうことなのかを実感することができました。

私の留学生活の中での大きな出来事の一つが東日本大震災です。その第一報を私は大学に設置されていたテレビで流れた BBC のニュースで知りました。聞き覚えのある地名とともに凄まじい波が渦巻く映像が映し出され、ただただ驚くばかりでした。家族や友人の多くと連絡が取れないまま、確かな情報が得られないまま、何もできずに過ごした週末でしたが、イギリスで出会った方々が気にかけてくださり、温かい言葉をかけてくれたり、メールをくれたりしたことで、気を強く持つことができました。その後、大学内やタウンセンターで被災地に向けてのチャリティ活動が行われ、多くの方が遠い日本のことを気にかけ、心配し、行動してくれる姿にとても励まされました。一方で、日本と海外の報道の仕方や内容には大きな違いがあり、また誤解や偏見を含んだ噂に接することもあり、日本が国外においてどのように見られているのかなど、日本について再考する契機ともなり、正確な現地の情報を伝える難しさや大切さも感じました。私は震災当時日本を離れていましたが、被災地に含まれる地域の出身者として、人権問題に関心を持つ者として、震災復興に貢献するなどの活動にも携わっていけたらと考えています。

現在は日本の大学に在籍しておりますが、この留学を通して得られた貴重な知識、経験、刺激をもとに、目標に向かって国際法の研究に精進します。

大学構内でのチャリティ活動の様子

（2010 年度 BCJA 奨学生, University of Essex, 国際人権法）

****

2010 年度 BCJA 英国留学奨学金授与者からの近況報告

ロンドン留学現在進行形

武田　裕子

1.　はじめに

BCJA 英国留学奨学金の 2010 年度奨学金授与者として、London School of Hygiene and Tropical Medicine（ロンドン大学衛生熱帯医学大学院）修士課程公衆衛生コースにてヘルス・プロモーションを専攻いたしました。2011 年 9 月に全課程を修了して、11 月に学位(MSc)授与の連絡をいただき、卒業式(学位授与式)は 2012 年 3 月に行われる予定です。現在は、King's College London School of Medicine (ロンドン大学キングス・カレッジ医学部)の地域医療教育部門で、医学部におけるヘルス・プロモーション教育の研究を進めながら、英国のプライマリ・ケア医療とその卒前・卒後教育に関する情報収集を行い考察を深めています。BCJA の奨学生であるということで、初めから高い評価をいただき活動しやすい環境が与えられています。

2. London School of Hygiene and Tropical Medicine (LSHTM)の学生生活

LSHTM は、国際保健(Global Health)領域における最高峰の大学院大学の一つで、優れた研究・教育活動を通して、また様々な国々におけるフィールド活動により、世界中の人々の健康向上に貢献することを目指しています。遠隔教育も含めると4000名あまりの学生が学んでおり、その出身地は 100 カ国を超えるそうです。私が在籍した修士課程は、ロンドン中心地にある大学院キャンパスで学ぶ 1 年間コースで、約 650 名の学生が 22 のコースに分かれて履修していました。

写真1. LSHTM のワークショップで Robert Chambers 教授と

私は、公衆衛生(Public Health)分野のヘルス・プロモーションを専攻しました。修士課程は3つの学期(term)に分かれており、規定に従い 12 科目を受講致しました。必修科目はそのうちの7つで、医療経済学、医療統計学、医療疫学、社会科学研究に加え、専攻するヘルス・プロモーション分野の理論、実施手法、実施計画書作成となっていました。選択科目としては、医療人類学(Medical Anthropology)、医療政策論(Health Policy, Process and Power)、医療システム学(Health Systems)、プライマリ・ヘルスケア(Primary Health Care)、グローバリゼーションと健康(Globalisation and Health)を受講しました。

修士課程在籍中は、毎日の講義とそれに続く小グループディスカッションで、山のような論文を読み解くことが求められ、ひたすら勉強を続ける毎日でした。学期末に提出する3000-4000 words のエッセイ(課題論文)は、毎回時間との戦いで、推敲を重ねようやく締め切りに間に合うといったことの繰り返しでした。課題の評価は厳密で厳しいものでしたが、必ず A4 用紙 1-2 枚程の詳細なコメントがついて返却され、次の学びにつながるよう配慮されていました。また、学生が授業を理解し課題に取り組めるように担当教員は助言を惜しまず、教育の質を保つために相当の努力がなされていると感じました。私自身も渡英前まで、大学教員として 13 年ほど勤務しましたが、大学院教育の在り方について多くの示唆を得ました。同時に、課題に追われ、自分が求められる基準に達していないのではないかという焦りを感じたときには、学業成績の振るわない学生はこんなにもつらい思いをしていたのかと身に沁みるようでした。課題の多さと厳しさに苦しむのは英語を母国語とする学生も同じで、図書館やコンピュータ室はいつも満員で、息抜きの時間もないほど、皆真面目に取り組んでいました。医療系出身者のほかに、法学や政治、国際開発など社会科学系の背景を持つ学生も多く、大いに刺激を受けました。

全科目の講義が終了して1か月ほど後の6月末に、2日間にわたる論述式の総括試験が行われました。成績の1/3がこの筆記試験で決定するため、みな相当のプレッシャーを感じて試験勉強に取り組みました。全体像を掴んでから各科目を復習することで理解が深まり、知識が定着したのも事実で、本来の試験の意味を再確認しました。

7—8 月は、summer project として自分で立案した計画に従って研究を行い、修士論文にあたる 10,000 words の project report 作成を行いました。私は、個人ならびに社会の健康に貢献する医師育成のため、医学生は何を学ぶべきかというテーマで、ヘルス・プロモーションの卒前医学教育への導入を検討しました。日本の医学部でヘルス・プロモーションがどのようにとらえられ教えられているかを質的・量的研究手法を用いて調査し、各国の状況と比較して今後に向けての提案を行ったものです。研究成果については、2012 年度の米国 Society of General Internal Medicine 学術集会、英国 Association for the Study of Medical Education にて発表すべく抄録を提出したところです。

3. 健康を規定する社会因子(Social Determinants of Health)と医師の役割

私の修士課程入学は、医学部卒業から実に 25 年後となりました。これはへき地医療や JICA の国際協力活動への参加を経て、切実に国際保健を学びたいと思うようになったためです。「地域医療崩壊」といわれる日本においてこそ、地域住民自らがイニシアティブをとり、地域づくりの中で自分たちの健康・well-being を高めることが求められており、それにはヘルス・プロモーション(HP)の枠組みが役立つのではと考えました。

LSHTM のプライマリ・ヘルスケア(PHC)の講義では、その基本理念として、住民主体の取り組み(community participation)、多職種(分野)間の協力(inter/multi-sectoral collaboration)、継続性のある保健医療システムの構築(Affordable and sustainable health system development)、適切な医療資源の活用(appropriate technology and proper use of resources)があげられ、また公正性と社会正義(equity and social justice)が不可欠と学びました。プライマリ・ヘルスケアは、概して医療資源の乏しい途上国における最低限の保健医療提供と関連付けられることが多く、先進国には無縁と思われがちです。しかし、1986 年の WHO オタワ憲章、1997 年のジャカルタ宣言において、プライマリ・ヘルスケアの理念がヘルス・プロモーションとして括り直され、先進国を含むあら

ゆる国々において人々の健康および well-being を得るために必要な行動分野・戦略として打ち出されました。このことを深く学ぶ中で、日本において「ヘルス・プロモーション」を推進することの意義をあらためて認識しました。

修士論文のための調査研究を進める中で、「ヘルス・プロモーション」は個人や集団を対象とした健康教育と同義と捉えられていることがあると分かりました。実は、私自身も留学するまでそのような理解でおりました。しかし、疾病の予防や治療のみでは、健康は得られません。オタワ憲章では、健康の前提条件として、平和、住居、教育、食糧、収入、エコ・システム、持続性のある資源、社会正義と公正性があげられています。これらが保障されてはじめて健康でいられるというわけです。だからこそ、保健医療セクター以外との協力が必要であり、住民が主体となった地域づくりが意味をもちます。ヘルス・プロモーションは、「HP＝医療政策×健康教育」とも定義されます。しかし、日本の医師へのインタビューや医学教育担当者へのアンケート調査では、政策に関わることが臨床医の仕事なのか、それらは行政が担うべきことではないか、多忙な臨床医は患者診療以外のことに時間を割けないというコメントが多数寄せられました。

一方、英国では、医学部卒業までに Social Determinants of Health（健康を規定する社会因子）について理解し、医療政策策定の基本的考え方や医療経済、健康格差・社会的公正について議論できるようになることを学生に求めています。現在、英国の医療システムに関して現政権から大きな改革案が出されていることもあり、家庭医(General Practitioners)の団体は、その年次総会で保健大臣を招いて議論するなど積極的な政策提言を行っています（RCGP 参加報告を日本プライマリ・ケア連合学会ウェブサイトに掲載して頂きました https://s17.zih.net/~primary-care.or.jp/form_php/file/styo1323161989.pdf）。しかしそれは、バス停を 2 つ行けば寿命が 10 年異なるといわれるような格差社会のなかで、あまねく医療を提供するために必須ともいえる状況に英国があるからともいえます。

今後は、そうした社会的背景のなかで提供される GP を中心とした英国の医療制度や、卒前卒後臨床教育について情報収集しつつ、ロンドン大学キングス・カレッジ医学部のヘルス・プロモーション教育プログラムについて研究を進めることになっています。社会の在りよう、医療提供体制の違いが、臨床教育にも如実に反映しているのを日々感じています。日本でも近年、ワーキング・プアという言葉が生まれ、貧困家庭の増加や世代間格差も出現しており、健康の前提条件を満たすのは当たり前ではない時代になってきました。個々の患者にとどまらず、社会的弱者に目を留め、地域全体の well-being 向上に取り組む医師の育成に役立つ研究ができればと願っています。

4. 東日本大震災と英国の日本人留学生

2011 年 3 月 11 日の大規模地震災害が起きた時、ロンドンは朝でした。信じられない気持で大学の講義に向かい教室に入ると、何名もの同級生が声をかけてくれました。居住している Goodenough College には 90 カ国の留学生 600 名が生活を共にしていますが、そこでも、皆日本のことを心にかけ、痛みを分かち合い、できる限りのことをしたいと言葉にして表現してくれました。

写真 2. 子供の通う小学校での日本復興支援ケーキセール

日本人留学生は、居ても立ってもいられない気持で何かの役に立ちたいと集まり募金活動を始めました。LSHTM でも Goodenough College でもすぐに協力を開始して頂きました。当時、在留邦人の方々の多くは、日本から遠く離れて安全に暮らせる環境にいること、また、被災者の力になれないことを申し訳なく思い、漠然とした不安感を持ち続けていました。しかしこうした感情は、現地で苦しい思いをされている方に比べたら取るに足りないことで、口にしてはいけないと感じていたように思います。そのようななか、募金に立ち寄ってくれた同級生や教員の先生方の励ましと慰めの言葉に、本当に元気づけられました。タイから来て法律を学んでいる Paul という大学院生の方は、「6 年前のスマトラ島沖大地震で、タイにも津波で大きな被害があったとき、すぐに日本から救援に来てくれた。今回の地震はみな心配して、タイで募金を始めている。タイは日本のような豊かな国ではないけれど、皆

少しでも役立ちたいと思っている。」と話してくれました。

私の子供の通う私立小学校は、全校生徒 80 名余りの小さな学校ですが、そこでも高学年の子供たちの自発的な提案でケーキセールが開催されました。自分たちで両親宛てに手紙を書いて generous support を呼びかけ、値段付けから販売まで行ってくれました（写真 2）。このような風景は、英国のあちらこちらで見られました。Goodenough College でも何度となくチャリティ・コンサートや講演会を開催し、募金活動を支援してくださいました。

Goodenough College は、その設立の際にキング・ジョージ VI 世や当時プリンセスであったエリザベス女王がご尽力されたということで、節目ごとに女王が訪問されています。2011 年 11 月には設立 80 周年の記念式典が催されました。その際、College における日本への支援活動のご報告と、英国中で温かい励ましをいただいていることのお礼を申し上げる機会を得ました(写真 3)。

写真 3. エリザベス女王に Goodenough College の日本支援活動をご説明

5. おわりに

地域・国によって医療資源に差があり制約のある中で、“人々が主体的に健康を左右する因子をコントロールできるように力づけ、地域づくりを応援する”働きかけは、日本の地域医療を考える上でも鍵となると思われます。ヘルス・プロモーションというと、個人個人が健康的な選択を行うための情報提供・健康教育がイメージされがちです。しかし、その行動を規定する、あるいは制約を与えるような社会的因子(Social Determinants of Health)が存在し、それに対する働きかけが不可欠とする考え方は、医学教育の中でももっと強調される必要があると感じています。

今後も与えていただいた貴重な機会を活かし、英国の医療・医学教育の多くを学びたいと願っています。BCJA 奨学生であったからこそ築けたネットワークを大切に、今後、少しでも頂いたものをお返しできるように努力を続けたいと存じます。BCJA のご支援に、あらためて深く感謝申し上げます。

（2010 年度 BCJA 奨学生, King's College London School of Medicine, 公衆衛生学）

****

2011 年度 BCJA 会計決算報告書

2010 年 11 月 1 日～2011 年 10 月 31 日

（一般の部）

収入の部

科　　目	金　　額
前年度繰越金	383,925 円
会　　費	170,000 円
入会金	4,000 円
合　　計	557,925 円

支出の部

科　　目	金　　額
案内状印刷代	1,600 円
封筒印刷代	53,370 円
事務用品代	4,122 円
メール便代	50,560 円
郵便代	1,150 円
振込手数料	800 円
ニューズレター印刷代	68,250 円
Web サイト維持料	37,842 円
アルバイト料	105,000 円
懇親会費	187,609 円
合　　計	510,303 円

2011 年 10 月 31 日現在の資産状況

次期繰越	47,622 円

（BCJA 奨学基金の部）

収入の部

科　　目	金　　額
前年度繰越金	737,843 円
郵便振込	1,268,320 円
合　　計	2,006,163 円

支出の部

科　　目	金　　額
奨学金支給	900,000 円
振込手数料	3,250 円
アルバイト料	70,000 円
口座徴収料金	1,600 円
合　　計	974,850 円

2011 年 10 月 31 日現在の資産状況

次期繰越	1,031,313 円

****

2012 年度 BCJA 奨学基金趣意書

2012 年 1 月 31 日

BCJA 会長　青柳昌宏

BCJA 奨学基金は、2000 年より BCJA 会員の有志の皆さまからの寄付金を基盤として、英国留学生の支援活動を着実に進めてきております。昨年度は、6 名の留学希望者に対して、奨学金を授与することができました。

今年度も奨学生の募集を行いますので、奨学基金へのご寄付をお願い申し上げます。

記

一口　5,000 円　二口以上でお願い申し上げます。同封の郵便振込用紙に、振込額、住所、氏名をご記入の上、下記口座宛にお近くの郵便局でお手続きいただければ幸いです。

ご寄附頂きました方々への領収書等の発行は特に致しておりませんが、必要であればご連絡、或いはご寄附の際に振込用紙にその旨、ご記載下さいますようお願い申し上げます。

尚、御礼状に関しては Newsletter にて代えさせて頂きますことを御理解下さい。

口座記号番号：00180-0-426794
加入者名：BCJA 奨学基金
事務局　　島津幸男
〒110-0016　東京都台東区台東 3-12-5
クラシックビル 606 号 (株)ビーユー内
連絡先　Tel：03-5807-9506　Fax：03-5807-9507
e-mail：yukio-s@be-you.co.jp

****

BCJA の銀行口座のお知らせ

金融機関名：　ゆうちょ銀行
金融機関コード：9900
店番：　019
店名：0一九店（ゼロイチキュウ店）
科目：　当座
口座番号：　0426794
受取人名：　BCJA　ショウガクキキン

要注意！

総会参加費等、BCJA　への振込時、ネットバンキングをご利用の会員の皆様には、次の点をご注意下さい。

振込先　：　ビーシージェイエー（BCJA）

****

2011 年度 BCJA 奨学基金協賛者一覧

2011 年 10 月現在

協賛者総数	71 名	総額	1,268,320 円
派遣者数	6 名	奨学金総額	900,000 円

協賛者氏名　（敬称略　順不同）：

戸田陽一郎	杉浦和朗	山口泰夫
栗本宗治	中山修一	菅井直介
西田宏子	北垣宗治	小鍛冶繁
山田昭廣	青山富士夫	猪原登志子
橋都浩平	田中典子	井上公正
平孝臣	田中彌寿雄	斎藤文良
川本敏	北政巳	矢口宏
河本直紀	今村聡	河合秀和
塚原重雄	三浦省五	南方暁
山下純宏	中井晨	伊東治己
青柳昌宏	野城真理	手塚統夫
横山昭	太田隆英	梅川正美
杉下守弘	岡井清士	田口博國
石井明	岡田博有	高柳和夫
峰本晫子	玉崎孫治	齋藤友博
田中治彦	益山新樹	高田康成
柴田賢	佐藤修二	前川功一
池上忠弘	石渡淳一	小倉暢之
関谷透	飯野正光	森田青平
多田稔	竹内百合子	海藤勝
森亘	横山俊夫	白鳥令
安藤奠之	能口盾彦	岡村定矩
町並陸生	清水護	島津幸男
難波光義	高須俊明	

****

BCJA ホームページについて

ホームページ担当

BCJA のホームページ http://www.bcja.net/では、過去のニューズレター閲覧、BCJA 英国留学奨学金、BCJA 活動状況、メンバー向け案内などがご覧になれます。幅広く有益な情報を提供できるサイトにするため、どうぞ皆さまからのご意見、ご希望をお寄せ下さい。

ishiikayoko@hotmail.com　まで

****

Yahoo!グループ[bcja]のご利用案内

Yahoo!グループ担当

BCJA 会員の情報交換、情報伝達などに活用していただくために、Yahoo!グループの中に BCJA 会員専用グループとして、[bcja]グループを新規に設定いたしました。既にメンバー登録を開始しております。登録を希望される方は、下記の URL にアクセスして下さい。

http://groups.yahoo.co.jp/group/bcja

電子メールのアドレスをお持ちでない方、また、個人、会社のアドレスでは何かと不便な方は、yahoo の電子メールアドレス（旅先などで共用 PC からも簡単にアクセスできます）が新たに取得できますので、そのアドレスをお使い下さい。

****

［編集後記］

青柳会長より後を受けて、前回号より編集を担当させていただきました。BCJA ニューズレター28 号では、BCJA 新会長による会長就任の挨拶、BCJA 英国留学奨学金 2011 年度選考結果報告、2010 年度 BCJA 英国留学奨学金授与者からの留学報告 5 件、会計報告などを掲載することができました。原稿をお寄せいただいた方々に大変感謝いたします。

本レターへの投稿を幅広く募集しております。皆様の留学体験談、研究・事業活動のご紹介、英国との交流事例、最新の英国事情など、英国と日本の交流に関する内容をについて、よろしくご投稿をお願いいたします。既に原稿をお送りいただき、掲載されました方々にも、続報の投稿をぜひよろしくお願いいたします。また、特集テーマ、原稿依頼先の案、紙面構成、編集方針などのご意見も積極的にお寄せいただければ幸いです。

なお、本レター発送については、会計担当の島津様にご協力いただきました。この場を借りて、心より感謝いたします。

(石井加代子、慶應義塾大学、London School of Economics, 2003-2004)